

但馬牛大規模繁殖農場での子牛損耗防止の取り組み

姫路家畜保健衛生所

○山本 剛 丸尾喜之 矢島和枝 小島温子
瀧 麻香 島田昌彦

平成 18 年、管内に但馬牛繁殖雌牛 200 頭を飼養する大規模農場が設立された。設立当初より肺炎・下痢による子牛の死廃が多発した。病性鑑定及び飼養状況調査の結果から飼養衛生管理において改善すべき点が多く見られた。

本農場は、県の推進する但馬牛増頭計画上重要であるため、平成 19 年 5 月、当所は関係機関からなる飼養管理検討会を設置し継続して指導したので概要を報告する。

【実施内容】

1 検討会の実施

当所職員の他、診療獣医師や農業改良普及員、団体指導担当職員らと共に畜主を交えて、現状の報告、飼養管理上の問題点の抽出、対策を検討し畜主へ改善指導を重ねた。

2 飼養管理改善

哺育記録や子牛の発育調査等から分娩前母牛の栄養不足と子牛への哺乳不足がうかがわれたため母牛の飼料内容及び給与量の改善、子牛への哺乳方法などを指導した。

暑熱対策として牛舎屋根への石灰塗布を実施、子牛の寒冷対策としてヒーターの設置や防寒着の活用を指導した。

3 疾病対策

呼吸器病では、マイコプラズマをはじめ各種病原体の感染時期・経路の推察、薬剤感受性を調査し適切なワクチン及び投薬プログラムへの変更を行った。消化器病では、クリプトスポリジウムが主要因と考えられ吸着剤の投与などを指導した。

病原体の伝播を防止するため子牛の配置及び作業動線を改善すると共に牛舎及び機具など徹底消毒を指導した。

【指導成果】

- 1 マイコプラズマの感染時期が平成 24 年度では 2 か月齢であったが、平成 25 年度では 4 ヶ月齢となり、幼若期での感染が防御できていると思われる。
- 2 生時体重は指導を開始した平成 19 年度と比較して平成 24 年度には 2kg 増加し雄 26. 2kg、雌 23. 8kg となり但馬牛の平均生時体重を上回った。
- 3 死亡率は最も高かった平成 20 年度のおよそ 1/4 に低下することができた。

【今後の課題】

死亡率は低下したがマイコプラズマ感染は持続しており損耗の主要な要因となっている。大規模農場では撲滅は困難であることが示唆され、他の呼吸器病との複合感染、水平感染の防止に継続して取り組む必要がある。